





# 目 次

1. 調 査 概 要	1
2. 調査対象地域図	2
3. 滋賀県の植生概説	3
4. 凡 例 解 説	6
5. 植生調査表（または組成表）	27
6. 資 料 リ ス ト	101
7. 調査担当者名簿	102

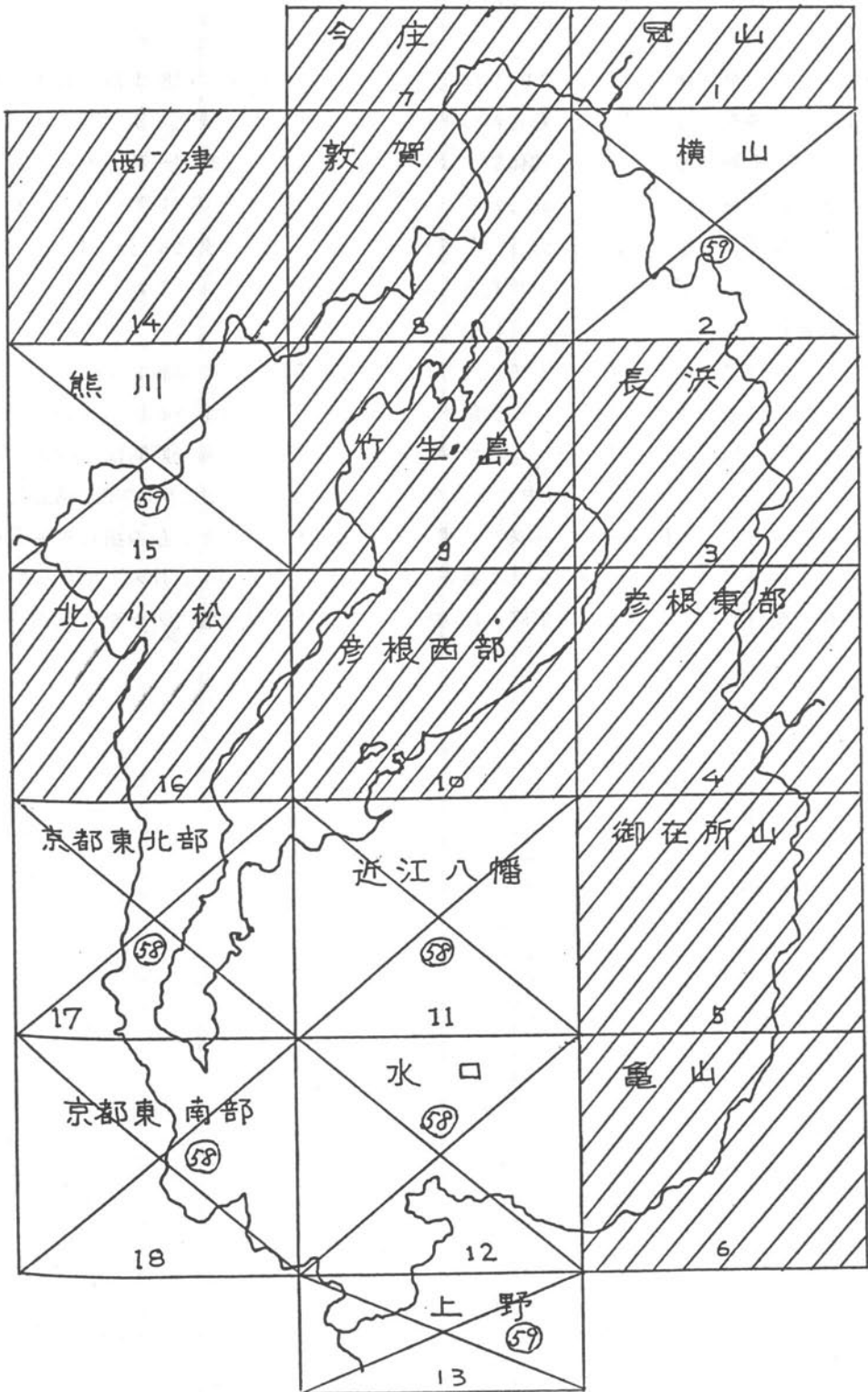


## 1. 調 査 概 要

今回の調査対象地域は、前回（1979年）調査された鈴鹿山脈、伊吹山地、野坂山地、比良山地の主要部を含む山地部や県北部の平野部一帯を除いた地域全てが包含され、前回と併せて県下全域が網羅される。具体的には、まず県東南部の平野部一帯とそれに続く山麓の丘陵地、田上・信楽山地や比叡山地などの山地部を含む地域で、5万分の1地形図では「近江八幡」、「水口」、「上野」、「京都東南部」、「京都東北部」に属する。さらに比良山地北部～野坂山地、伊吹山地北部も調査対象地域に含まれ、これらの地域は5万分の1地形図では「熊川」、および「横山」にそれぞれ属する。

調査は、現地における植生調査と植生図作成の室内作業に分けて実施した。まず現地調査については、これまでに調査資料の収集がなされていない地域を中心に、5万分の1の地形図ごとに、出現する植生単位について植生調査を実施した。調査期間は1983年7月から10月、1984年7月から10月の2ヶ年にわたり、その間に計156の植生調査資料を収集した。一方、植生図作成室内作業は、現地で確認、修正された既存の現存植生図を原図として、航空写真の判読作業と併せて修正が続けられ、1985年2月末までに、植生単位の正確な配分が5万分の1の地形図上に描かれ、最終的な現存植生図が全て完成した。

2. 調査対象地域図



### 3. 滋賀県の植生の概説

#### (1) 気 候

滋賀県は、日本海型気候区と太平洋型気候区、および瀬戸内型気候区が相接した位置にある。また、三方からそれぞれ若狭湾、伊勢湾、大阪湾が湾入し、本州の最狭部となっているほか、盆地地形の中央部に県土の6分の1の面積を有する琵琶湖が存在しているなど、かなり複雑な地形要素が加わり、その気候はかなり変化に富んだものとなっている。県内の気候を細分すると、図のように8つの気候区に分けることができる。なお、鈴木時、鈴木和(1971)は、温雨図の形を分析することによって、グラフの1月点と8月点を結ぶ直線とX軸とのなす角度(右回り)が太平洋型気候区では鋭角、日本海型気候区では鈍角になることを発見し、この角度を日本海指数と呼んだ。つまり、日本海指数が90°の値を示す地点を結んだ線が、両気候区の境界となるが、本県ではこの線は、湖西の三国岳、安曇川、長浜、金糞岳南部付近を通っており、本県の気候区を太平洋型気候区と日本海型気候区とに区分する上で、有力な手がかりとなる。

#### (2) 地 形

滋賀県の地形は、琵琶湖を中心に、その周辺に沖積低地、丘陵地、さらにそれらの外縁部を1000 m級の地壘山地が取り囲むという特徴をもっている。琵琶湖は六甲変動によって形成された近江盆地底が滞水で

きた湖盆である。盆地縁は同じ地殻変動によって形成されたと考えられる湖東の伊吹山地、鈴鹿山脈や湖西の比良山地、比叡山地など南北に卓越した地壘山地群、および湖南の小起伏を成す信楽・田上山地、湖北の断層地塊群などから成っている。沖積平野と丘陵地は、琵琶湖と山地の間にドーナツ状に配列し、盆地床を形成している。このように盆地地形か

気候区分図



ら成る本県では、一部の地域を除いて分水嶺と県境が一致しているため、120余の河川のほとんどが琵琶湖に流入し、その水は瀬田川を通じて大阪湾に流出する。

### (3) 地 質

滋賀県は地質構造上、紀伊半島の中央部を横断する中央構造線によって西南日本内帯に包含され、その基盤を成しているものは、古生層と、これを貫く花崗岩類および火砕流堆積物で、盆地周辺の山地に広く露出している。滋賀県の古生層は秩父古生層と呼ばれ、古生代二疊紀に生成されたものと推定されている。主として粘板岩、砂岩、チャートから成っているが、一部石灰岩や海底火山活動による緑色の塩基性火山岩から成る山地もみられる。花崗岩類や火砕流堆積物（湖東流紋岩類）は、中生代白亜紀末の火山活動によって生成されたものである。このほか鈴鹿山脈の山麓の一部には新生代新第三紀層（主として礫岩から成る鮎河層群）が、また山地の内側の丘陵地には、新第三紀鮮新世～第四紀洪積世前期にかけて古琵琶湖に堆積した古琵琶層群とこれを不整合におおう段丘礫層がみられる。さらにその内側に分布する沖積層は、県東南部を中心に琵琶湖の周辺に広々とした沖積平野を形成している。

### (4) 植生概要

滋賀県の植生帯は全て、ヤブツバキクラスとブナクラスの両クラス域に包含される。すなわち、沖積低地から丘陵地、山地の標高700m付近まではヤブツバキクラス域で、その上がブナクラス域である。ただ両クラス域の境界は、県北部にいくにしたがって日本海型気候の影響により、標高400m位まで下降する。また、この境界付近に相当する山地の中腹部には、ブナクラスやヤブツバキクラスの要素が等しく出現し、その所属決定の困難な、いわゆる中間温帯林が存在する。

以下に高度別の本県の植生概要を述べる。

#### 1) 沖積低地

沖積低地では、近年の急速な都市化によって植生は破壊され、残された植生といえば、水田雑草群落や耕作放棄水田雑草群落が主である。本来の自然植生はシーカナメモチ群集、アラカン群落、イノデータブ群集などの常緑広葉樹林（照葉樹林）であるが、それらはほとんど皆無に等しく、わずかに社寺境内や墓地周辺などに小面積残存しているに過ぎない。

#### 2) 丘陵地

丘陵地には、モテツツジーアカマツ群集やクヌギーコナラ群集のような二次林が半自然植生として成立している所が多く見られる。しかし、特に湖南地方を中心に急速な都市化によって丘陵地が開発され、減少傾向にある。丘陵地では自然植生はほとんど見られないが、尾根部にアラカン群落、山麓部にシーカナメモチ群集が断片的に残存していること

もある。

### 3) 山 地

ヤブツバキクラス域に属する山地下部は、大部分モチツツジーアカマツ群集によって覆われているが、湖東から湖北の尾根や急斜面においては、いくつかの夏緑広葉樹の二次林が見られる。特に湖北の急斜面においては、ケヤキ林（チャボガヤケヤキ群集）、ケヤキウラジロガシ林（ヒメアオキウラジロガシ群集・ケヤキ亜群集）などの自然林が成立している所もある。

山地中～上部にかけては、ブナの自然林、ミズナラなど夏緑広葉樹の二次林、スギ・ヒノキなどの針葉樹の植栽林がモザイク的に分布している。しかし、ブナクラス域の自然林も人々の生活圏や産業圏の拡大とともに、植林地、保養・観光地として開発利用され、減少の一途にある。

その他、山頂付近には、ある特殊な立地条件の下に成立している自然植生も見られる。たとえばオオイタヤメイゲツミヤマカタバミ群集や自然草原（アカソーオオヨモギ群集など）は石灰岩地帯に、アカヤシオ群集は風化侵食された花崗岩地帯にそれぞれ限定して生育している自然植生である。

## 4. 凡例解説

### (1) ブナクラス域自然植生

#### 1) ヒメアオキープナ群集

##### 相観－夏緑広葉樹の高木林

本県北部に分布するブナ林は、オオバクロモジ・ヒメアオキ・マルバマンサク・シノブカグマ・イクウチワ・ウワミズザクラなど主として日本海要素の種群によって特徴づけられ、ブナーオオバクロモジ群集として認めたが、ここではこれに類似したヒメアオキープナ群集に所属させて考えた。分布は、琵琶湖の東側では伊吹山以北、西側では比良山地、生杉以北で、冬期北西季節風の影響を強く受け、積雪量の多い日本海側山地に限られる。また垂直分布は、標高340～1314mとかなりの標高差が認められる。

高木層は、樹高15m前後のブナが林冠層を形成し、植被率は平均80%である。ブナの胸高直径は、地域によっては50～100cmに達するものも見られるが、多くはそれ以下で、いわゆる原生林に相当する植分は存在しない。高木層にはミズナラが目立つ植分も多く、そうした二次林に近い植分では、アズキナシ・イタヤカエデ・ウリハダカエデ・アカシデなどの夏緑広葉樹と混生している。亜高木層ではブナのほかに、マルバマンサク・ミズナラ・ハウチワカエデ・リョウブなどが、また低木層ではオオバクロモジ・エゾユズリハ・ヒメアオキ・タンナサワフタギ・ハイイヌガヤ・ミヤマシキミ・タムシバ・ヒメモチ・ホツツジなどが目立つ。草本層には、低木層の幼・稚樹に加えて、イワウチワ・ヤマソテツ・ホソバカンスゲ・シンガシラなどが多い。植分によっては、イブキザサやチシマザサが林床を覆うこともある。

本群集は、本県ブナクラス域における代表的な自然植生であり、また琵琶湖の水質保全面でも重要な役割を果たしており、厳密な保護が切望される。

### 3. スギーブナ群落（ブナーアシウスギ群落）

#### 相観－夏緑広葉樹、常緑針葉樹の混交高木林

アシウスギは、日本海側に分布するスギの変種で、幹が基部から株立ちし、また倒伏した枝から発根するなど、積雪による破壊作用に適応した生活形を備えている。本県では、丹波山地の東端、比良山地を中心とした標高700m以上の地域に広い面積にわたって分布している。林冠層の高さは平均15mで、アシウスギが単独で優占することもあるが、多くはブナやミズナラなどの夏緑広葉樹の林冠の上にアシウスギの樹冠が突出したような林相を呈し、針広混交林の森林形態をとっている。こうした群落をスギーブナ群落として認めた。

高木層はアシウスギのほか、ブナ・ミズナラ・コシアブラ・ホオノキ・ハウチワカエデ

などが混生する。亜高木層や低木層には、コミネカエデ・シロモジ・リュウブ・マンサク・クロモジ・タンナサワフタギなどが優勢である。また草本層には、シノブカグマ・ホソバカンスゲ・ミヤマシグレ・シシガシラなどが多い。

本群落は、ヒメアオキープナ群集とクロモジープナ群集の推移部分に分布しているが、こうした分布や種組成、群落構造などから考えて、本来、気候の極盛相としてクロモジープナ群集が成立する立地が、日本海型気候の影響を特に強く受けたり、地形・土壌などの立地条件が厳しい場合、本群落が成立するものと考えられる。

## 5. イヌブナ群集

### 相観—夏緑広葉樹の高木林・亜高木林

比良山の奥深谷をはじめとする標高400～900mの谷筋の比較的湿潤な斜面に局部的にはあるが、高木層でイヌブナが優占している植分が認められる。組成的には、イヌブナクマシデ・ダンコウバイ・ハイイヌガヤ・ミヤマガマズミ・チャボガヤなどによって特徴づけられ、イヌブナーチャボガヤ群集と考えられるが、ここではイヌブナ群集として表現した。本来、イヌブナやシデ類は太平洋側を分布の本拠としているが、これが日本海側に生育域を広げ、ハイイヌガヤ・チャボガヤなどの日本海要素と結びついて成立したのが本群集であると考えられる。

本群集の垂直分布は、ブナクラス域とヤブツバキクラス域の推移帯に位置しながらも、その構成種にはヤブツバキクラス域の指標種はほとんど見られず、逆にアオハダ・ネジキ・タンナサワフタギ・タムシバ・クロモジ・アクシバなどのブナクラス域指標種の方が顕著に出現する。

## 8. ヒメヤシャブシータニウツギ群落

### 相観—夏緑広葉樹の低木林

伊吹山地北部、比良・野坂山地などの山頂付近には、タニウツギ・タンナサワフタギ・リュウブ・マルバマンサクなどの優占する高さ5m前後の落葉低木林が見られる。この低木林は、タニウツギ・ウリハダカエデ・イワガラミ・タンナサワフタギ・カマツカを標徴種・識別種とするタニウツギ群集にまとめられているが、ここでは、ヒメヤシャブシータニウツギ群落として報告する。この群落は、一般に山頂部や尾根筋に立地しているため、日当たりや風当たりが特に強く、また土壌が浅いなどの理由により、ブナ林などその立地固有の自然植生への復帰が阻害され、一種の土地的極相として本群落が成立していると思われる。

金糞岳山頂や尾根筋の植分では、タニウツギ・タンナサワフタギ・マルバマンサクのほか、ツノハシバミ・ヤマアジサイ・ハイイヌガヤ・オクノカンスゲ・ミヤマイボタ・オオバクロモジ・リュウブなどが目立つ。

## (2) ブナクラス域代償植生

### 10. ブナーミズナラ群落

相観－夏緑広葉樹の高木林・亜高木林

ブナクラス域の極盛相であるブナ林が薪炭材採取などのため破壊された後、その回復途上にある遷移途中相が本群落に相当すると考えられる。このことは、ブナクラス域指標種のうち、ブナを欠いているものの、ミズナラやアズキナンが高常在度で出現するなど種組成的にブナ林とほとんど相違が認められないこと、およびリョウブ・ウリハダカエデなどの二次林要素が特に顕著に出現することからも首肯できる。

分布は、県南部では標高800m以上、北部では標高450m以上の地域に限られている。

### 11. クリーミズナラ群落

相観－夏緑広葉樹の高木林・亜高木林

中間温帯の代表的な二次林で、高木層・亜高木層はミズナラが優占し、クリ・コナラ・シデ類がこれに混生している。低木層はクロモジ・タンナサワフタギ、草本層はチゴユリ・コアジサイが高常在度で出現する。

分布は標高300～800mまでの県下全域におよび、立地条件は一定していない。本群落の上部にはブナーミズナラ群落、下部にはクスギーコナラ群集、モチツツジーアカマツ群集（ヤマツツジーアカマツ群集）がそれぞれ位置している。

本群落の生育域の自然植生は多様で、モミシキミ群集、イヌブナ群集、クロモジブナ群集、ヒメアオキブナ群集などが考えられる。本群落は、これらの自然植生が薪炭材採取などのため伐採された後、成立している半自然性二次林である。

### 13. アカマツ群落

相観－常緑針葉樹の高木林・亜高木林

本群落は、アカマツーアラカン群団に対応するブナクラス域のアカマツ林で、ミズナラ・タンナサワフタギ・コアジサイ・マンサク・シロモジ・ユキグニミツバツツジ・ホソバカンスグ・ヤマボウシ・ハイイヌガヤなど温帯性要素によって特徴づけられる。

高木層はアカマツが優占するほか、コナラ・ミズナラなどが混生している。亜高木層には、コナラ・リョウブ・ソヨゴ・ヤマボウシなどが、また低木層にはシロモジ・ホツツジ・ヤマウルシ・ネジキ・マンサクなどが生育している。

分布は比良山地を中心に、湖北地方でも認められ、垂直的には標高500～600mの範囲に集中している。

## 14. ササ草原

### 相観－ササ草原

本県山地の山頂部や尾根筋など風衝の影響を強く受ける立地には、しばしばササ草原が広がっている。ササ草原の成因は、多くの場合、ブナ林などの自然林が伐採等により破壊された後、ササが繁茂し、厳しい立地条件と相まって森林への復帰が阻害されて草原状態を続けている半自然性の持続群落と考えられる。

今回の調査対象地域では、比良山地や野坂山地にはイブキザサ優占のササ原が、伊吹山以北の金糞岳、三国岳の山頂部にはチシマザサ優占のササ原が、また横山岳の山頂部にはチマキザサ優占のササ原がそれぞれ見られる。このうち、横山岳のチマキザサ群落には、イヌツゲ・リュウブ・ヤマウルシなどの山頂・尾根筋に発達する低木林（ヒメヤシャブシータニウツギ群落）との共通種も見られる。このことから、チマキザサ群落は低木林が何らかの原因で退行した後、風衝作用と相まって持続している植生とも考えられる。

なお、凡例としてはあげられていないが、ヤブツバキクラス域では、三上・田上・信楽地方の丘陵地や平地には、ミヤコザサ優占のササ原が認められる。

## 15. ススキ群団（ブナクラス域）

### 相観－草原

本県山地の山頂部や尾根筋などの風衝地、スキー場などにはススキ優占の草原が比較的広い面積で点在している。この草原には、ススキ・タニウツギ・ハコネヒヨドリなどの種群が比較的高い常在度で出現するが、構成種はその立地条件によって多様である。すなわち、ほとんどススキ単独の単純な植分から、好陽性の二次林要素や湿生植物、ドクダミ・ヨモギ・イタドリなど的人為的影響を指標する人里植物などが複雑に混入した植分まで多岐にわたる。したがってススキ草原の生態的な位置も、半自然性の持続群落、あるいは人為的な持続群落と考えられるもの、森林への遷移途上群落と考えられるものなど、様々である。

## 16. 伐採跡群落（ブナクラス）

### 相観－伐採跡群落

ブナクラス域の森林が伐採された跡地に認められるいくつかの群落を一括してこの凡例で表現した。したがって、その構成種は、伐採された森林の種類や伐採後の経過年月によって異なる。一般に森林が伐採されると、それまで蓄積されていた落葉などの有機物が急速に分解され、無機物が増加して一時的に富栄養の状態になる。しかも、光、風、湿度などの環境条件が急変するため、従来の森林構成種の多くは生育困難となり、新たに埋土種子や風散布種子から発芽した好陽性・好窒素性の種群が繁茂することが多い。

後述するヤブツバキクラス域の伐採跡群落では、ダンドボロギク・ベニバナボロギク・

オオアレチノギクなどのキク科帰化植物を特徴とするが、ブナクラス域では、クロモジ・マンサク・リョウブ・タンナサワフタギ・イヌツゲ・タラノキ・クマイチゴなどの木本植物が群落を構成する場合が多い。

### (3) ヤブツバキクラス域 自然植生

#### 17. モミ・シキミ群集

相観—常緑針葉樹の高木林・亜高木林

比叡山や比良山、金勝山などのブナクラス域とヤブツバキクラス域の移行帯に相当する標高300~900mの地域に分布している代表的な中間温帯林が本群集である。本県では、北緯35°15'以南の地域（湖東の御池岳と湖西の百里ヶ岳を結んだ線より南側）に成立している。

本群集は、モミ・シキミ・ウラジロガシ・シラカシ・アカガシ・キッコウハグマの種群によって特徴づけられ、樹林高が50mに達する植物から10m程度の低い植分まで様々である。林冠層はモミが単独で優占している場合もあるが、イヌブナ・イヌシデ・アカシデ・ミズナラなどの夏緑広葉樹やスギ・アカマツ・ヒメコマツなどの常緑針葉樹と混生、または場所によってはこれらの種が優占している植分も見られる。また、林床には、シキミ・ヒサカキ・アセビ・クロモジ・アクシバ・コアジサイ・シンガシラ・ウスギヨウラクなどの植物が、比較的高常在度で出現する。

本群集の立地は、谷筋の湿潤な立地条件から山腹や尾根筋の日当たりの良い浅土性の立地条件まで様々であるが、森林施業の発達とともに伐採され、スギやヒノキの植林地と化しており、現在では、主として人の手が加わり難い尾根筋に点状、または帯状に残存しているのが認められるに過ぎない。

#### 19. ケヤキ・チャボガヤ群集

相観—夏緑広葉樹の高木林

湖北地方の主として高時川や杉野川、姉川上流の谷筋急斜面を中心に県北部に小面積ながら広く点在するケヤキ林。林床には、ハイイヌガヤ・ヒメアオキ・ハナイカダ・チャボガヤ・ニシノホンモンジスゲなどウラジロガシ・ヒメアオキ群集の標徴種・識別種をともなっているが、ウラジロガシを欠くこと、およびヤブツバキクラス域の指標種をほとんど含まないことによって特徴づけられる。

高木層は、樹高15~20mのケヤキが優占するほか、ミズナラ・クマシデ・イタヤカエデなどが混生して、植被率は80%前後を示す。亜高木層は、植被率が平均50%とやや貧弱で、ケヤキ・エゾエノキ・エノキ・ミズキ・ダンコウバイなどが主な構成種であるが、低海拔地の谷部ではオニグルミが混生している植分も見られる。低木層・草本層には、ハイイヌガヤ・ヒメアオキ・ヤマブキ・ハナイカダ・ジュウモンジシダ・ニシノホンモンジスゲなどが目立つ。

本群集の立地は、溪谷沿いの崖錐斜面や河川に面した湿潤な土壌の堆積した山腹急斜面など、不安定な立地条件下に成立していることが多い。このため、当地域の気候の極盛相であるウラジロガシ・ヒメアオキ群集の成立が難しく、一種の土地的極盛相として本群集が成立していると考えられる。そして、そこにケヤキ林が生育することによって土壌浸食をくい止め、山崩れや雪崩を防止するなど立地の安定化、そして道路や人家の保安のために大きく貢献している。一方で、ケヤキ林は比較的人里に近いため、伐採などの人為的干渉を受けやすい状況下であり、現実にスギの植林地として置き換えられている所が多く見られる。しかし、ケヤキ林の成立する厳しい立地条件下での植林は不可能であり、今後容易な伐採、植林地化は、県土保全の上からも厳に慎む必要がある。

## 20. ケヤキ・ムクノキ群集

### 相観－夏緑広葉樹の高木林

沖積平野の神社境内や愛知川、野洲川、草津川流域の自然堤防などには、局部的にケヤキ・ムクノキが優占する植分が認められる。このケヤキ林は、主として湖東地方に分布し、ムクノキ・アラカシ・マダケ・アオツヅラフジによって特徴づけられるケヤキ・ムクノキ群集にまとめられる。立地条件は、河川流域の比較的水分条件に恵まれた、土層の厚い適湿地となっている。

高木層は、樹高20m前後のケヤキが優占し、ムクノキ・エノキ・スギ・ヤブニッケイ・クスノキなどを混じえて、75%以上の高い植被率を示している。亜高木層や低木層には、ケヤキのほか、アラカシ・ヤブツバキ・アオキなどの常緑広葉樹が高い常在度で出現している。草本層は、それより上層の常緑樹のほか、ジャノヒゲ・ヤブラン・キツタ・ビナンカズラ・キチジョウソウなどの常緑広葉樹林構成種、ヤエムグラ・ヘクソカズラ・チヂミザサ・ツユクサ・アカメガシワ・ミツバアケビなど、強い人為的影響を指標したマント・ソデ群落構成種が多数出現している。出現種数は、人為的影響の度合いを反映して、70種を越える複雑な種組成の植分から、20種程度の単純な植分まで多様である。

## 21. ケヤキ・コウヤワラビ群集

### 相観－夏緑広葉樹の高木林

湖北の姉川や湖西の石田川などの下流を中心に、堤防の適湿地に成立しているケヤキ林には、ハチクを伴った植分が認められる。このケヤキ林は、ハチク・コブシ・ミゾシダ・コウヤワラビ・ハグロソウの種群によって特徴づけられ、ケヤキ・コウヤワラビ群集にまとめられている。

高木層は樹高15~20mのケヤキが優占し、80%前後の高い植被率で林冠を形成している。亜高木層はケヤキ・エノキなどの夏緑広葉樹に、シロダモ・ヤブツバキ・ヤブニッケイなどの常緑広葉樹が混生している。また低木層においては、アオキ・キツタの生育が目

立ち、キツタは亜高木層にまで達している場合も見られる。さらに草本層は、シャガ・ヤブラン・ミョウガ・キチジョウソウなどの植物が特徴的に出現していて、植被率は平均90%におよび、林床の発達は極めてよい。

本群集はケヤキ・ムクノキ群集とともに堤防林として保護すべき貴重な植生の一つである。

## 22. アラカシ群落

相観—常緑広葉樹の高木林・亜高木林

本群落は、アラカシ一種によって識別される群落で、高木層・亜高木層においてアラカシが高い優占度で出現している。

構成種を見ると、亜高木層以下にシイ・カナメモチ群集の構成要素がかなり多く認められるが、シイをはじめ、いくつかの種を欠いていることによって特徴づけられる。したがって、本群落は、本来シイ・カナメモチ群集であった植分が、シイの伐採によって一時的にその自然性が破壊された後、環境適応の幅が広いアラカシが、人為的影響を受けやすい平地の、しかも日当たりが良く、浅土性の乾燥しがちな立地に生育し得たことによって成立したものと推察される。

## 23. ツクバネガシ群落

相観—常緑広葉樹の高木林・亜高木林

本群落はツクバネガシによって特徴づけられる群落で、一般に土壤条件の恵まれた立地条件下に成立している。

本県では、彦根城内や八日市市の徳晶寺境内、太神山、比良山地のオトシ付近などに社寺林として、または山地部の斜面などに極めてまれに分布している。本調査地は標高530mのかなり高海拔地で、高木層にはヒノキ・ウラジロガシ・ヒメコマツを混生している。また、低木層以下では、サカキ・ヒサカキ・ヤブツバキ・ヤブニッケイなどのヤブツバキクラス域指標種のほか、一部クロモジ・オオカメノキ・コシアブラなどのブナクラス域指標種も生育している。しかしながら、本群落の確認地点は少ないため、その一般的特性を考察することは困難である。

## 24. シラカシ群集

相観—常緑広葉樹の高木林

本群落は、シラカシ・ナンテン・シュロ・チャノキによって特徴づけられ、主として湖北地方の平野部や山麓の社寺境内や堤防などに、ケヤキとともに樹林を形成していることが多いが、極めてまれに、甲賀郡や湖南地方にも断片的に残存している。

本調査地は河畔林で、高木層には、クヌギ・アラカシを混生している。亜高木・低木層

には、シラカシのほか、ヤブツバキ・アラカシ・ヒサカキ・アオキ・ネズミモチなど多数の常緑広葉樹や、エゴノキ・フジ・ミツバアケビなど人為的影響を反映したマント群落構成種が目立つ。また、草本層には、上層の常緑広葉樹のほか、ジャノヒゲ・ヤブコウジ・キジノオシダ・ゼンマイ・ハリガネワラビ・フユイチゴなどが生育している。

## 25. シイ・カナメモチ群集

### 相観－常緑広葉樹の高木林

本群集は、シイ・カナメモチ・シャシャンボ・ソヨゴ・ナナメノキ・リンボク・ジュズネノキによって識別される本県の代表的な常緑広葉樹林で、平野部から丘陵地にかけての社寺境内や山麓に小規模ながら広く分布している。ことに、大津市長等山の三井寺境内や伽藍山山麓に分布するシイ林は、面積が広く、階層構造もよく発達して、自然状態がよく保たれている。

高木層は、植林によるヒノキも高い常在度で出現しているが、一般にシイ（ツブラジイ・スタジイ）が優占している。亜高木層においては、シイのほか、カナメモチ・ナナメノキ・サカキ・ヤブツバキ・リンボクなどの常緑広葉樹に、タカノツメ・コシアブラなどの夏緑広葉樹が混生している。低木層は、シイ・カナメモチ・シャシャンボ・アラカシ・サカキ・アオキ・ヤブツバキ・ヒサカキなどの常緑広葉樹が顕著である。また草本層には、上層の常緑樹の幼・稚樹をはじめ、ベニシダ・ヤブコウジ・ヤブラン・サルトリイバラ・ヤマウルシ・シシガシラ・チヂミザサ・フユイチゴ・ササクサなど多様な植物が生育している。

## 26. イノデータブ群集

### 相観－常緑広葉樹の高木林

本群集は、タブ・イノデ・ナガバジャノヒゲによって特徴づけられ、高木層はパラシュート状の樹冠を呈するタブが優占するが、時にケヤキが優占して、ケヤキ林の相観を呈する植分もある。ケヤキを含む植分はケヤキ亜群集としてまとめられ、高木層・亜高木層にはケヤキのほか、ムクノキ・イロハモミジなどの夏緑広葉樹が優占し、林床には、イノコズチ・ツユクサ・ヤエムグラ・チヂミザサなどの人里植物が出現する。一方、ケヤキを欠く植分は典型亜群集としてまとめられ、亜高木層には、アラカシ・ヤブニッケイ・サカキ・ヤブツバキなど多くの常緑広葉樹が繁茂している。低木・草本層は、上層の常緑樹の幼・稚樹のほか、ベニシダ・イノデなどの常緑性シダ植物が顕著である。

本群集は、主として湖東・湖北地方の標高 100 m 前後の沖積低地の河畔や社寺境内、扇状地の土壌が深い、比較的湿性立地に成立している。本来、タブ林は海岸地域に発達するものであり、本県においても、海岸の環境要素を有する琵琶湖岸に多く分布しているが、八日市市や日野町など内陸部でも、その存在が確認されている。

### (13) アカマツ群落 (アカマツ・ヒメコマツ群落)

相観—常緑針葉樹の高木林・亜高木林・低木林

大津市から栗東町にかけて連なる湖南アルプス一帯や信楽高原などの、主として花崗岩風化地の酸性貧栄養土壌で乾燥した立地条件下に成立しているアカマツとヒメコマツの混交針葉樹林を、ここではアカマツ群落として表現した。

森林形態は、立地条件の相違を反映して、樹林高25 mに達する成熟した高木林から、3 m程度の低木疎林まで様々で、一定しない。

組成的には、高木層まで有する植分では、高木層はヒメコマツが優占、またはアカマツやヒノキなどと混生している。植分によっては、アカマツが優占している場合もある。亜高木層には、ソヨゴ・コナラ・リュウブ・ネジキなどが、また低木・草本層にはコバノミツバツツジが最も優勢なほか、ヒサカキ・ヤマウルシ・サルトリイバラ・イヌツゲ・ゴツクバネウツギ・アセビ・ミヤマガマズミなどが目立つ。低木層以下に、ヒメコマツの幼・稚樹を伴生している植分が多く、またヒメコマツは比較的耐陰性が強いことから、本群落の天然更新は可能である。

本群落は、その立地条件から考えて、当地域の気候的極盛相である常緑広葉樹林(シイ・カナメモチ群集など)に遷移することは困難で、一種の土地的極盛相と考えられる。

### 28. フサザクラ群団

相観—夏緑広葉樹の高木林

比良山地、野坂山地、伊吹山地などの標高400～1000 mの溪谷斜面には、フサザクラ・チドリノキ・トチノキ・ミズキ・サワグルミなどの優占する湿生林が認められる。この湿生林は、フサザクラ・チドリノキ・ミヤマハハソを標徴種・識別種とするリュウモンジダーフサザクラ群集としてまとめられる。ところで、この群集の上級単位については、種組成的にはサワグルミ群団に、岩礫の多い斜面に立地し、生態的にはフサザクラ群団にそれぞれ類似しており、いずれの群団に所属させるかはなお検討を要するが、今回はフサザクラの出現を基に、フサザクラ群団として報告する。

林冠層は、大部分の植分では樹高10～20 mのフサザクラが優占し、高木層を欠く場合もある。サワグルミなどが優占する植分では、樹高30 mにおよぶものも見られる。亜高木・低木層には、チドリノキ・フサザクラが優占し、また草本層にはサカゲイノデ・リュウモンジダ・ジュウモンジシダなどのシダ植物が顕著であるほか、アカソ・ミカエリソウなどの湿生植物も豊富である。

### 29. ハンノキ群落

相観—夏緑広葉樹の高木林・亜高木林

ハンノキ林は、山麓部の緩傾斜の谷沿い、山地に近い池沼周辺部、平地河川の沖積低地、

放棄されて年月の経過した水田など、地下水位が高く、時には地上に水が停滞するような立地に、小面積ながら、県内各地に散在して分布している。土壌条件は、一般に水分の浸透性が悪く、上流の古生層起源の土壌が谷水によって運搬されて堆積した所や、土壌的に風化の進んだ水田放棄地などに限られる。

最上層は、ほとんどハンノキ一種が優占し、ハンノキの純林の景観を呈している。高木層をもつ植分の場合には、亜高木層における他樹種の混生も少ない。低木層は概して未発達で、林床には、ミゾソバ・カサスゲ・クサヨシ・チゴザサなどの湿性植物が繁茂し、植被率も100%、もしくはこれに近い植分が多い。低木・草木層には、低被度ながら、ヘクソカズラ・ノブドウ・ノイバラ・ススキなどマント・ソデ群落構成要素が高い常在度で出現する。

県下のハンノキ林は、それが成立している立地条件を微妙に反映して、種組成的に明らかな相違が認められ、ハンノキセリ群集、ハンノキヨシ群集、ハンノキイヌツゲ群集に区分されている。生態的にも、水分条件が変化しない限り、他群落へ遷移しない土地の極盛相と考えられる植分から、土壌の乾燥化と併せて遷移過程にある植分まで、様々であり、これらは、前述の群集区分にも対応している。

### 30. 河辺ヤナギ低木群落

相観－夏緑広葉樹の亜高木林・低木林

琵琶湖湖岸の汀線や池沼、河川の中州や岸辺、溪流辺などには小面積ながら帯状に、ヤナギ類の低木林もしくは亜高木林が散在して分布している。

上層は、アカメヤナギ・タチヤナギ・カワラヤナギ・イヌコリヤナギ・ネコヤナギなどのヤナギ類が優占し、それぞれの群落を形成している。下層には、ヨシ・ツルヨシ・ミゾソバ・アメリカセンダングサ・カサスゲ・オオイヌタデ・クサヨシなどの湿性植物のほか、ノイバラ・ヘクソカズラ・ヤブガラシ・アオツツラフジ・ノブドウなどのつる性のマントソデ群落構成種が目立つ。

立地は、増水時冠水し、少なからず土壌の移動がある不安定な砂泥質多湿地で、流水による物理的破壊作用は植生に大きな影響をおよぼしている。ヤナギ類は深根性で、幹や枝が弾力性に富んでいるなどの特性により、そうした不安定立地でも生育できるようである。そして、そこにヤナギ類が生育することが、土地に腐植質を与え、また植生に対する破壊作用を最少限に食い止めるはたらきをしている。

### (4) ヤブツバキクラス域代償植生

#### 31. クヌギーコナラ群集

相観－夏緑広葉樹の高木林・亜高木林

アカマツ林に隣接して、山地帯下部や山麓には、コナラ・タヌギ・アベマキなどを主体

とする夏緑広葉樹林が分布しているこの夏緑広葉樹林は、クリ・エゴノキ・ヤマザクラ・シラカシ・クヌギ・ホノバカンスゲの種群によって特徴づけられ、クヌギ・コナラ群集としてまとめられた。

本群集には、下草刈りや落葉かき、数十年に一度の伐採などを通して人為的に維持・管理され、また再生されてできた、いわゆる薪炭林や、近年のマツ枯れによってアカマツが枯死し、かわってコナラなどの夏緑広葉樹林への更新が行われている植分、伐採跡地のマント群落からの遷移途上林なども含まれ、またその分布域も、ヤブツバキクラス域からブナクラス域下部にまでおよんでおり、相観的にも種組成的にも多様で、複雑な林相を呈している。

本県のクヌギ・コナラ群集は、クロモジ・チゴユリ・マンサク・ツリバナなどの冷温帯要素によって特徴づけられ、湖北・湖西を中心に一部湖南の標高350m以上の地域にも分布するクロモジ亜群集と、アベマキ・チヂミザサなどが出現し、湖東・湖南を中心に分布するアベマキ亜群集に下位区分されている。

### 32. 伐採跡地群落（ヤブツバキクラス域）

#### 相観－伐採跡地群落

森林の伐採により、その跡地に短期間にはあるが成立する植物群落。構成種は、伐採された森林の種類（自然林、スギ・ヒノキ植林、アカマツ林など）や伐採後の経過年月によって異なるが、ヤブツバキクラス域においては、ダンドボロギク・ベニバナボロギク・オオアレチノギク・ヒメムカシヨモギなど陽地性のキク科の帰化植物のほか、やや群落遷移が進んだ植分では、ススキ・ニガイチゴ・ナガバモミジイチゴ・イタドリ・アカメガシワ・ノイバラ・サルトリイバラ・クズ・タラノキなどのマント群落構成種が目立つ。

### 33. ススキ群団（ヤブツバキクラス域）

#### 相観－草原

耕作放棄後3～6年を経過した畑地、河川や池沼の堤防、湖岸や河川敷などに生育しているススキ草原のほとんどが、ススキ群団に所属する二次草原である。こうしたススキ草原は二次遷移の途中相であり、刈り取りや火入れなどの人為的作用、または川の氾濫などの物理的作用が加わる限り、持続するが、そうした作用が停止すれば、やがては陽性の木本植物の侵入によって遷移が進行し、衰退消滅する運命にある。したがって、その構成種は立地条件や人為的干渉の度合いを反映して、ススキ以外は植分によって異なっている。一般に、乾燥地には、ヨモギ・チガヤが多く、適湿な放棄畑や河川敷などには、アメリカセンダングサ・メヒシバ・ヒメジョオン・エノコログサが、また有機物に富んだ線路沿いの土手などには、ゲンノショウコ・オトギリソウ・スギナなどの種群が目立つ。

#### 34. クズ・カナムグラ群落

##### 相観－草原

本来は林縁にあって、その林を覆うように発達している主としてつる植物からなるマント群落为本群落に相当するが、ここではそうした林縁植生だけでなく、耕作放棄畑、道路や線路周辺の法面、河川堤防などに見られるクズ優占の植分も本群落に含めて考えた。構成種は、クズが最も優勢であるほか、ススキ・セイタカアワダチソウ・ママコノシリヌグイ・ヨモギ・カナムグラ・ノイバラ・ヘクソカズラなどが含まれ、植被率は、ほとんど100%を示す。

本群落は、個々の群落面積が小規模であるため、大部分は植生図に表示されていない。

#### 35. セイタカアワダチソウ群落

##### 相観－草原

造成地、荒地、乾性の耕作放棄水田、河川敷などには、キク科の帰化植物であるセイタカアワダチソウが優占する高さ2m内外の草本植物群落が成立している。本群落は、種組成的には隣接のクズ・カナムグラ群落やヨモギ群落との共通種が多いが、セイタカアワダチソウが完全に優占することによって、他の群落と識別される。構成種はほかに、ヒメジョオン・オオアレチノギク・ヒメムカシヨモギなどの帰化植物やススキ・ヨモギなどが目立つ。

分布は平野部を中心に、県下全域に普遍的に認められるが、群落面積が小規模であるため、植生図にはわずかに表示されているに過ぎない。

#### 36. ヨモギ群落

##### 相観－草原

路傍、河川の土手、空地、河原などに生育しヨモギ・ツユクサ・ススキ・ヒメジョオンなどの種群によって特徴づけられる路傍雑草群落。本群落は特に土湿などの立地条件を反映して、その種組成や相観に大きな差異が認められる。乾性立地ではススキが、やや湿性の農道路傍などではヨモギがそれぞれ優勢で、ほかにイタドリ・チゴザサ・カナムグラなどが混生する。また、多少人為的干渉の強い空地や路傍などには、オオバコ・ヒメムカシヨモギ・ヤハズソウなどが特異的に出現する。

#### 37. モチツツジ・アカマツ群集

##### 相観－常緑針葉樹の高木林・亜高木林・低木林

本県のヤブツバキクラス域の二次林として、丘陵地から低山地にかけて最も大きな面積で発達している樹林といえ、アカマツ林であるが、なかでもモチツツジ・ノギラン・マルバハギなどの種群によって特徴づけられるモチツツジ・アカマツ群集は、安曇川町と米

原町とを結んだ線を北限として、湖東、湖西から湖南にかけて広大な面積で分布している代表的なアカマツ林である。これらアカマツ林の中には、花崗岩起源の風化した土壌が見えるほど疎林となっている植分から、群落階層も整い、林内にヤブツバキ・アラカシなどの常緑広葉樹林構成種が多数生育している成熟した植分まで、様々な形態が認められる。本群集の特徴は、高木層や亜高木層の有無にかかわらず、モチツツジ・コバノミツバツツジ・アセビなどツツジ科の低木類の顕著な繁茂にある。また、いずれかの階層でヒノキを伴生していることも、大きな特徴の1つである。

最上層は、ほとんどの植分でアカマツが優占し、高木層を有する植分ではその下層に、ヒノキ・ネジキ・ヒサカキ・タカノツメ・コナラ・ソヨゴ・ヤマウルシなどが亜高木層を形成している。また低木層には、モチツツジ・コバノミツバツツジをはじめ、ソヨゴ・アセビ・ヒサカキ・シャシャンボ・ナツハゼなどの低木類が繁茂している。草本層は、立地条件の相違によって大きな差異が認められる。たとえば、残留植物といわれるオオイワカガミやイワナシが優占する植分、チヂミザサ・アオキ・フユイチゴ・キンミズヒキなど比較的陰性で、湿性地を好む植物が目立つ植分、ニガイチゴ・スルデ・アカメガシワ・ナガバモミジイチゴなど、マント群落を指標する比較的陽性の植物が目立つ植分、ハナゴケ、トゲシバリ・ネズ・ガンビ・トダシバなど、さらに陽性で乾燥地にも生育可能な植物が目立つ植分など変化に富んでいる。

### 38. ヤマツツジ-アカマツ群集

#### 相観-常緑針葉樹の高木林・亜高木林

湖北～湖西の標高100～300mの丘陵地や低山地を中心に、時に湖南の標高500m以上の山地に分布しているアカマツ林は、コシアブラ・クロモジ・ウリカエデ・チゴユリ・ナンキンナナカマドなどの種群によって、モチツツジ-アカマツ群集に対応する植生単位として位置づけられているが、これが本群集に相当すると考えられる。

高木層は、樹高20mのアカマツが完全に優占している。亜高木層には、コシアブラ・ヤマウルシ・ウリカエデが高い常在度で出現しているほか、コナラ・ソヨゴ・リュウブがこれらに次いで多い。低木層には、クロモジ・ヒサカキ・ホツツジ・ナツハゼが出現するほか、クヌギ・コバノミツバツツジが高い優占度を示す植分も見られる。林床には、ヤマツツジ・サルトリイバラ・ヤブコウジ・イヌツゲ・カクミノスノキが多く、次いでシシガシラ・ワラビなどのシダ植物が多い。上層の繁茂によって上空が陰蔽されているため、林内は他のアカマツ林に比べて暗く、適度の湿気を有する安定した環境になっている。また、こうした林内条件を反映して、出現種数は平均35種と豊富である。

本群集はヤブツバキクラス域上部に位置し、暖温帯から冷温帯への移行帯に発達する二次林植生の一種である。

### 39. クロマツ群落

#### 相観－常緑広葉樹の高木林・亜高木林

本県のクロマツ林は、湖南地方の田上山一帯のように土砂流出防備保安林として造林されたものも一部見られるが、大半は、琵琶湖岸および河畔などの砂泥質で、地下水位の高い比較的湿潤な立地に、二次林もしくは植林として生育している場合が多い。

湖岸および河畔のクロマツ林に特徴的な植物としては、上層ではアカメガシワ・エノキ下層ではヘクソカズラ・スイカズラ・ノブドウ・イノコズチ・ヨモギなどの先駆植生やマント・ソデ群落構成種があげられる。したがって本県のクロマツ林は、海岸の自然植生として成立しているクロマツ林とは明らかに種組成が異なる。また、立地条件の相違によっても種組成を異にし、砂質で保水性に乏しく、有機物の含有量も少ない立地には、コマツナギ・ネムノキ・カワラマツバ・メドハギなどの種群が特徴的に出現する。また、湖岸より比較的遠距離の安定した立地や河畔などには、ビナンカズラ・アマチャズル・ナワシロイチゴ・ツヅラフジ・イボタノキなどの種群が特徴的に出現する。

一方、土砂流出防備保安林として造林されたクロマツ群落では、同じく植栽されたヒメヤシャブシ・オオバヤシャブシが混生しているほかは、土壌組成が大部分花崗岩起源の礫質であるため、保水性に乏しく、そうした貧栄養立地に耐えられるススキ・リュウブ・ソヨゴ・コバノミツバツツジなど隣接するアカマツ林の要素がわずかに生育しているに過ぎない。

### (5) 河辺・湿原・塩沼地・砂丘植生

#### 40. ヌマガヤオーダー

##### 相観－草原

ヌマガヤを含む、いわゆる中間湿原をヌマガヤオーダーとして一括して表示した。本県では、野洲町希望ヶ丘文化公園内のように貧栄養、強酸性で、多湿の花崗岩地帯の不透水地、および西浅井町の西河内湿原のように山間、凹地状地形の湛水地などに成立している。その分布は大小含めると、草津市、八日市市、栗東町、野洲町、多賀町、山東町、西浅井町などの平野部や丘陵地から、鈴鹿山脈、比良山地などの山間部まで県下全域に点在している。

組成的には、ミミカキグサ・ホザキノミミカキグサ・ムラサキミミカキグサ・イシモチソウ・コモウセンゴケなどの食虫植物、サギソウ・トキソウ・カキランなどのラン科植物、シロイヌノヒゲ・イトイヌノヒゲなどのイヌノヒゲ類などが特異的に生育し、様々な群落を形成している。なかでも、県下最大規模を誇る西浅井町の西河内湿原は、ミツガシワ・ミカヅキグサ・ハリミズゴケをはじめ、多数の湿生植物を含んでおり、近畿地方より東北・北海道の高層湿原の凹地地に発達するヌマガヤ・ミカヅキグサ群団の南限と考えられている。

こうした中間湿原は、学術的に極めて貴重な群落であるが、立地の乾燥化とともにヨシやハンノキが侵入し、ヨシ群落やハンノキ群落へと遷移しはじめ、やがては消滅する運命

にある。したがって、本群落の保護は単にその生育地だけでなく、水源環境をも含めた厳密な保護施策を構じる必要がある。

#### 41. ヨシクラス

##### 相観－草原

琵琶湖岸、池沼、河川敷、埋立地、休耕田など地下水位の高い湿生立地には、ヨシ優占の挺水植物群落が発達している。大部分は、高さ3mにも達するヨシが90%以上の高い植被率で生育するが、時にはオギやマコモが優占した植分も見られる。ヨシは、水分条件に対する適応の幅が広く、茎の半ばまで沈水する立地から、地下水位のかなり低い陸地にまで生育することができる。したがって、ヨシ群落の構成種も立地条件によって異なり、アオツラフジ・アメリカセンダングサ・アゼトウガラシなど多数の植物を伴生したかなり安定した植分、沈水植物のコウガイモ・ネジレモが特徴的に生育している植分、ヨシが単独で群落を形成している地下水位のかなり高い立地の植分など様々である。

琵琶湖岸のヨシ原は、全体で約200haといわれ、尾上～早崎、長命寺～野洲川河口（特に近江八幡市から安土山にいたる水郷地帯や西の湖）、南湖東岸、安曇川河口周辺に比較的まとまった面積で残されているが、干拓や埋め立て、湖岸堤工事などの開発により、年々減少の一途をたどっている。ヨシ原の果たす水質浄化機能や魚や水鳥の生息・産卵地としての役割を考える時、その保護・保全が強く望まれる。

#### 42. ツルヨシ群集

##### 相観－草原

河川上流のV字溪谷から、中・下流の河川敷にかけて、砂礫質で比較的地下水位の高い立地には、ツルヨシ優占の群落が発達している。ツルヨシは、発達した根茎と地上部を走る走出枝によって繁殖するため、河原など増水時には頻りに冠水し、流水により土砂の移動・堆積がおこる不安定な立地でも、常に優占種となって、持続的に群落を形成する。

構成種は、ツルヨシのほか、クズ・カナムグラなどのマント群落構成種、アメリカセンダングサ・セイタカアワダチソウ・アレチマツヨイグサなどの帰化植物、湿性ではミゾソバ・ツククサ、また比較的乾性立地ではヨモギなどの路傍雑草が、それぞれ立地条件に応じて生育している。

#### (6) 植林地、耕作地植生

##### 44. スギ・ヒノキ植林

##### 相観－常緑針葉樹の高木林・亜高木林

本県において、アカマツ林に次いで広大な面積を占めている森林植生は、ヒノキ・スギを主体とする植林である。一般に、県北部の多雪地帯や南部でも谷筋の土層が厚い湿潤な

立地にはスギが、一方、中腹から尾根部など比較的乾燥した土壌が浅い立地にはヒノキが植栽されており、年々、その面積を広げつつある。

種組成や構造は、立地条件の相違だけでなく、林齢、植栽密度、植栽林としての管理状態なども反映して、様々であるが、樹高15～20mになるとかなり安定した組成を示す。一般に、スギ林の構成種数は40種近いが、ヒノキ林はこれより少なく、15～20種程度の植分が多い。これは、ヒノキの落葉は粉末状となって流れやすく、腐植層が形成されにくく、もともと土壌が浅い立地条件と併せて、土壌の貧化が著しいことが一因としてあげられる。

高木層は、スギ・ヒノキがそれぞれ優占するが、ヒノキの植林にあってはアカマツが混生している植分が多い、亜高木層は、極めて貧弱で、しばしばこれを欠いている。低木層と草本層は、ヤブツバキクラス域に分布する植分では、アラカシ・ヤブニッケイ・アオキ・アセビ・ヒサカキなどの常緑広葉樹が、またブナクラス域に分布する植分では、クロモジ・タンナサワフタギ・シロモジなどの夏緑低木が顕著である。

## 45. 竹林

### 相観—竹林

本県に分布する竹林は、モウソウチク・マダケを主体とし、小規模ながら、各地の丘陵、山麓や集落の裏山、河岸などに多く分布している。

種組成や群落構造は、管理状態を反映して異なるが、地理的分布によっても多少の違いが認められる。まず、湖南から湖東にかけて分布する竹林は、高木層にモウソウチクが優占し、亜高木層にはアラカシ・ヤブツバキが高い常在度で、また林床にはサカキ・カナメモチ・ナンテン・オモト・ジュズスゲ・ササクサなどが特徴的に生育する。次に、湖東地方と一部湖西の安曇川付近には、ノアズキ・アカネ・スギナ・ヘビイチゴ・ヨメナなど、マント・ソデ群落構成種や人里植物によって識別される人為的干渉を強く受けた植分が認められる。さらに、湖東から湖北にかけて広く分布する林内は、高木層や亜高木層に、ケヤキ・エノキ・シラカンなどの大木を伴い、ケヤキとキツタが特に強く結びついて出現する。この竹林は、一般に放置されたものが多く、竹内には、シラカン・シュロ・ジャノヒゲ・ヤブラン・シロダモ・アオキなど、当地域の自然植生であるシラカン群集構成種が多数生育している。

## 46. 落葉果樹園（カキノキ林）

### 相観—夏緑広葉樹の亜高木林・低木林

県内で栽培されている落葉果樹としては、カキ・ナシ・ブドウ・モモ・クリ・リンゴなどがあげられるが、比較的まとまった面積を有するものとしては、マキノ町としては、マキノ町のクリ園、湖東～湖南にかけての平地や丘陵地に多く分布するナシ園、ブドウ園、

カキ園などがある。これらのうち、カキは一般に高温を好み、特に甘ガキの代表的品種である「富有」は、本州中部以南に多く栽培されており、本県および岐阜県が栽培の北限とされる。

本群落は、カキノキが優占するものの、クズやノブドウ・ヤマノイモ・スズメウリなどのつる植物が被覆し、下層にはカキドウシ・ミゾソバ・ススキ・ノイバラなどの植物が繁茂しており、かなり放置された状態になっていることが多い。

#### 48. 茶畑

相観－常緑広葉樹の低木林

茶畑は県内全域に分布し、その面積は1290 ha（1983年）に達しているが、特に土山町や信楽町など甲賀郡を中心に大津市・永源寺町・愛東町・日野町など湖東から湖南にかけての丘陵地に多く分布している。チャノキはこのように茶畑に栽培されるほか、農家の周辺や畑の境界部に、また畑の作土が飛ぶのを防ぐために、帯状に植栽されていることもある。

茶畑は、定期的に1 m程度の高さに刈り込まれるため、階層構造は未発達で、チャノキのほかに、メヒシバ・オオアレチノギク・ヨモギなど畑地や路傍雑草群落の構成種が含まれる。

#### 49. 苗圃

相観－常緑広葉樹・夏緑広葉林・常緑針葉樹の低木林

苗圃は、一般に山麓や平野部の排水良好地にみられ、県内各地に点在しているが、山東町や甲西町などに分布するものが比較的大きい。苗圃には林木苗圃と植木苗圃があり、材木苗圃ではスギ・ヒノキ・アカマツ・クロマツなどの樹種が、植木苗圃にはツツジ類・ツゲ類・マツ類などの庭園用樹種や緑化用樹種がそれぞれ育苗されている。圃内には、ミミナグサ・ヒメスイバ・カラスノエンドウなど畑地雑草群落構成種が生育している。

#### 50. 畑地雑草群落

相観－草地

耕作畑は、作物を育てるために耕起、施肥、除草、収穫などの人為的な管理が継続的に加えられている。そのため、耕作畑には1.2年生草本を主体とする特有な雑草群落が形成される。この群落は同一立地でも季節によりその構成種を異にしており、冬～春にかけては、ハコベ・ミミナグサ・ホトケノザなど、また夏～秋にかけては、メヒシバ・カヤツリグサ・スベリヒユなどがそれぞれ優占する。

本県における耕作畑雑草群落の植物社会学的研究は十分に進んでいないが、その組成などから、本州・四国・九州にかけて広く分布するカラスビシャク－ニシキノウ群集に相当

するものと考えられる。

本群落の分布は、山麓、丘陵地、平野部などの肥沃な排水良好地に、小規模ながら多く点在している。

### 51. ヒメムカシヨモギ・オオアレチノギク群落

#### 相観－草地

本群落は、耕起・除草などの人為的干渉が停止した耕作放棄畑や造成地などの比較的肥沃な立地に、いち早く成立する2年生～多年生草本を主体とする雑草群落である。主要構成種は、ヒメムカシヨモギ・オオアレチノギク・ホウキギク・ヒメジョオンなどのキク科の帰化植物である。本群落の成立期間は短く、やがてヨモギやススキなどの多年生草本が侵入し、他の草地性の植物群落や、さらには陽地性低木林へと遷移していく。

分布は、県内各地に広く認められるが、特に山間部や山麓部などに多い。

### 52. 牧草地・人工草地

#### 相観－草地

カモガヤ(オーチャドグラス)、ネズミムギ(イタリアンライグラス)、オオウシノケグサ・ナガハグサなどの外来、あるいは自生の牧草が優占する牧草地、人工的に造られたゴルフ場以外のシバ草地、シナダレスズメガヤ(ウィービングラブグラス)などによる緑化法面などがこの凡例に含まれる。

牧草の盛んでない本県では、牧草地は西浅井町の山中牧場、日野町の県営種畜場などわずかであるが、シバ草地や緑化法面などの人工草地は県内全域に点在している。比較的まとまった面積のものとしては、野洲町の希望ヶ丘文化公園があげられる。その他、公園、運動場、名神高速道路や北陸自動車場の法面など各地に見られる。

### 53. ゴルフ場

#### 相観－草地

ゴルフ場は、コウライシバなどシバの園芸品種や他の外来のシバ類が播種、あるいは移植され、施肥、刈り込み、除草など定期的な人為管理下に成立しているシバ草地である。シバ類が圧倒的に優勢で、その他の植物の生育を見出すのは困難なほどであるが、管理が粗放になるにしたがって、ミミナグサ・カタバミ・スズメノヤリ・オオイヌノフグリなどの畑地や路傍雑草群落の構成種が侵入してくる。

本県では、大津市、栗東町、甲賀町、土山町、龍王町、日野町、彦根市など湖南～湖東を中心に、かなり大規模なゴルフ場が多く分布している。

## 54. 水田雑草群落

### 相観－草地

耕作、施肥、除草、収穫といった極めて強い人為的管理下にある耕作水田には、水田特有の一定の種組成をもった持続的な雑草群落が成立している。この水田雑草群落は、イネの生育期によって2つに大別される。まず、4～5月の田植えからイネが生育し、結実するまで、たえず5～10cmの深さの水をたたえている夏季の湛水期に成立する夏季水田雑草群落は、ウリカワ－コナギ群集に所属する。一方、秋の収穫期から翌春までの排水後の水田には、夏季のものとは種組成も構造も全く異なる冬季水田雑草群落が成立している。これは、ノミノフスマ－ケキツネノボタン群集（乾田）、スズメノテッポウ－タガラシ群集（湿田）に所属すると考えられる。

本県では、水田は琵琶湖周辺の沖積低地に最も広い面積で、また丘陵の谷筋にも小面積ながら帯状に分布し、全国的にも有名な近江米の生産地となっている。しかし、近年の宅地開発により、都市部を中心に減少傾向にある。

## 55. 休耕田雑草群落

### 相観－草地

近年、わが国の農業政策による休耕田や、都市近郊の宅地造成予定地となって耕作が放棄された水田が急増し、そこには多様な耕作放棄水田雑草群落が形成される。

種組成は、耕作放棄後の経過日数や水分条件、微地形などの微妙に異なる立地条件を反映して様々であるが、本県では、放棄後1年目の水田には、ミゾソバ・イヌビエ・コブナクサ・チゴザサ・アシボソなどの湿生植物が侵入し、放棄水田一帯を覆う。時にアメリカセンダングサ・セリなどの著しい生育が認められる場合もある。その後、ヨシ・ガマ・コガマなど大型の湿生植物が目立つようになり、しだいに群落遷移が進行し、3～4年目あたりになると、ハンノキ・ヤナギ類などの低木の侵入が認められる。

## (7) その他

### 56. 市街地

都市の市街地から山間の集落まで、建物の集団およびその他の建造物を市街地として表示した。

### 57. 緑の多い住宅地

市街地のうち、緑の多い（緑被率50～60%以上）住宅地を、緑の多い住宅地として表示した。

58. 工場地帯

市街地のうち、工場の集団を工場地帯として表示した。

59. 造成地

工場や住宅の造成地や土砂・岩石の採取地など、人為的に生じた無植生地を造成地として表示した。

60. 開放水域

湖沼，河川，ため池などを開放水域として表示した。

61. 自然緑地

懸崖，崩壊地，砂州など自然の無植生地を自然裸地として表示した。



## 6. 資 料 リ ス ト

番 号	筆 者 名 (または発行者名)	発行年	資 料 名
1	滋 賀 県 (編集)	1979	第2回自然環境保全基礎調査 植生調査報告書
2	小 林 圭 介 (代表)	1979	滋賀県の植生
3	〃 (他)	1980	草津市の植生
4	〃 (責任編集)	1981	滋賀県現存植生図
5	大 谷 一 弘 (他)	1983	栗東町の植生
6	宮 脇 昭 (代表)	1984	日本植生誌-近畿-
7	小 林 圭 介 (他)	1984	滋賀県百科事典
8	建設省国土地理院	1975	モノクロ空中写真 横 山
9	〃	1979	〃 熊 川
10	〃	1982	〃 水 口
11	〃	〃	〃 近江八幡
12	〃	〃	〃 京都東北部
13	〃	〃	〃 京都東南部
14	〃	1983	〃 伊賀上野

## 7. 調査担当者名簿

番号	氏名	所属	区分
1	小林圭介	滋賀県立短期大学	総括責任者
2	村上宣雄	木之本町立杉野中学校	現地調査・植生図作成責任者
3	大谷一弘	草津市立老上中学校	現地調査・植生図作成・凡例解説
4	村長昭義	多賀町立大滝小学校	現地調査・植生図作成
5	蓮沼修	元・三共KK社員	// //
6	青木繁	マキノ町立マキノ北小学校	// //
7	小西民人	八日市市立玉園中学校	現地調査
8	西田富士夫	大阪府立枚方高校	//
9	竹田雅次	橿都市緑地研究所	現地調査・植生図作成
10	麻生泉	//	// //
11	浜端悦治	滋賀県琵琶湖研究所	// //
12	松永之和	守山市役所	// //
13	富長妙議	元小学校教諭	// //
14	高木淳	マキノ町立マキノ北小学校	// //
15	大家優	大阪府立芥川高校	現地調査
16	北村敏子	多賀町立大滝小学校	//
17	青山喜博	近江八幡市立八幡小学校	//
18	井田三良	八日市市立八日市北小学校	//
19	南尊演	滋賀県立栗東高校	//
20	渡辺寿子	京都市立山科中学校	//
21	清水輝晴	自営業	//
22	北川憲司	滋賀県庁	//
23	黒田有為子	兵庫医科大学 附属病院 薬剤士	//



